

第三章

本研究の方法

A. 研究の方法

この研究は質的と量的な研究方法を使用している。量的方法はテストのデータに関係があり、質的方法是アンケートとインタビューのデータに関係がある。レポートを書くためには、この研究はでスクリプト方法を使用する。つまり、この論文に書いているデータは本当の研究と同じである。

この研究は実験研究であり、ある学習のテクニックを実験している。すなわち；作文を書くための学習テクニックである。タリガン（2009：pりんしp）によると、実験研究は本の構造があり、ポプレション、トリトメント、ポプレションのレーングである。ポプレションは注意する。

実験研究は二つに分け、実験とクアシ実験である。実験研究は実験二つグループサンプルにトリトメントを実行し、クアシ実験研究は一つグループだけにトリトメントを実行する。この研究はクアシ実験研究であり、一つグループサンプルにトリトメントを実行

するから。すなわち、スマラン国立大学の日本語学科の三年生の学習である。

それから、この研究の構造はプレテスト、トリトメント、ポストテストでできている。学習者の作文を書く能力を知るためにはプレテストを実行される。それから、何回かにトリトメントを実行されている。そのトリトメントが学習者の作文を書く能力に影響のあるのを知るために、ポストテストを実行される。この研究構造はもっと明らかにするように、次の章を注意しましょう。

表 3. 1. 実験研究の構造のスキーマ

プレテスト(T1)	トリトメント(X)	ポストテスト(T2)
T1	X1, X2, X3, X4	T2

説明:

T1 = プレテスト

T2 = ポストテスト

X1-X4 = トリトメント

B. ポプレーションとサンプル

1. ポプレーション

ナワウィ（イズアン、2008：54－55）によると、研究の対象から集める量的と質的なデータである。そのポプレションは二つ数類にできている。すなわち；範囲があるポプレションと範囲がないポプレションである。範囲があるポプレションは量的にと明らかにデータの範囲が決まり、範囲がないポプレションはデータの範囲が決まっていないポプレションである。

それから、ポプレションはホモゲンとヘテロゲンに分けられている。ホモゲンポプレションは量的に同じ数類のデータがある。ヘテロゲンポプレションは量的に同じではないデータがあり、特別な範囲がいられるようになる（リズアン、2008：55）。

上記の説明によると、この研究はホモゲンポプレションがある。すなわち；スマラン国立大学の日本語学科の三年生の学習者である。このポプレションは同じクラスと日本語の能力があるから。

2. サンプル

ステデイ（2009：179）によると、サンプルはデータのソースになるポプレションの部分である。このサンプルの決定することがあるプロセスを使用し、サンプルを決定するテクニックと言われている。すなわち、ポプレションからサンプルを取り付けるテクニックである。

この研究のサンプルはスマラン国立大学日本語学科の三年生の学習者である。このサンプルを決定する原因は二つある。すなわ

ち； a) 実験するテクニックが三年生に実行する作文を書く学習に関係があるから、 b) この大学の一人の作文を書く先生からの指摘することから。

C. 研究の道具

1. テスト

この実験研究はテストが二回あり、トリトメントの前のプレテストとトリトメントの後のポストテストである。このテストがスマラン国立大学の日本語学科の三年生の学習者の作文を書く能力を知りに実行される。つまり、量的なデータを集めるために、このテストを実行する。

この研究のテストは目的が三つある。すなわち； a) 学習者がある言語的なインプット（特に：語彙と文型）を使用し、そのインプットを広げる能力を知ることで、 b) 学習者がある書き物の話題とかテーマを決定し、そのテーマの通りに、意見を広げる能力を知ることで、 c) 学習者がある広げられた意見通りに、ある作文の構造とかうまくて、明らかな流れのを並べる能力を知ることである。

それで、上記の目的に基づき、実験する教授項目は学習者に勉強されたことがある教授項目である。それは学習者が勉強したことがあるいくつかの文型に基づき、作文を書くことである。この文型は上記で書かれている意見を広げることで、インプットを使用す

ることに関係がある。つまり、この文型のあるのは学習者にインプットを使用させ、意見を広げさせる。

2. アンケート

研究の質的なデータを集めるために、アンケートを使用する。その質的なデータは、たとえば；作文を書く学習に学習者の興味やその問題や作文を書く学習の方法や実験する学習の方法の5W+1Hテクニックに関係のあることである。学習者はこのアンケートの答えを書いているとき、自由に選択的のを決定する。

この実験研究のアンケートは十五質問でできている。各質問は四つ選択的な答えがある。その選択的な答えはあるパーセンテージの制度に関係があり、SS, S, AS, TS, STSである。SSはパーセンテージが86%–100%で、Sは71%–85%で、ASは56%–70%で、TSは41%–55%、STSは0%–40%である。しかし、学習者は選択的な答えを決定するためには、このパーセンテージを書かなくても良い。

3. オブセルベーションノート

この実験研究のプロセスを注意するために、あるオブセルベーションノートを使用される。このオブセルベーションノートは目的が二つある。すなわち；学習者のことや教師のことである。研究

のトリートメントが行っているかぎり、教師はこの二つのことをノートに書いている。

教師のことは、教師が教授項目の分かることとその教え方、学習活動を学習仕方、学習者の学習興味を高め方、学習者とインタラクション仕方などを表す。学習者のことは、学習興味、学習仕方、友達とインタラクション仕方、などを表す。この二つのことから、学習のプロセスを注意され、実験する教授法の弱点と強点の知られる。

D. データを収集の方法

リズアン（2008：97）によると、バリドとレリアベ
ルデータを集めるために、適当なデータの収集方法がある。それで、
そのようなデータになるように、この研究はいくつか収集方法がい
られる。それはテスト、アンケート、インタビューでできている。

E. データを分析の方法

テスト、アンケート、オブセルベーションノートから集めら
れるデータは本当にある研究の結果にまだなれないことができる。
ある良い研究結果になれるように、そのデータを分析するプロセス
がいられる。すなわち；1) データを集めるプロセス、2) そのデ

ータをあるカテゴリーにするプロセス、3) そのカテゴリーにするデータを分析するプロセスである。

1. テスト

テストはプレテストとポストテストでできている。プリテストはトリートメントの前に、実行さ、ポストテストはトリートメントの後で実行される。この二つのデータを分析のために、スタテイスティックパラメテックの方法を使用する。すなわち；デスクリプトスタテイスティックとデIFFェレンシアルスタテイスティックである。

初めに、集めるデータはデスクリプトスタテイスティック方法で記述し、平均値、標準偏差値、メックシムム点、ミニムム点、標準平均値を調べる。そして、デIFFェレンシアル統計値で、そのデータを分析、研究の仮説を検証する。次に、その分析したデータに基づき、T得点を調べ、研究の結論を設定する。

2. アンケート

このアンケートとから集めデータを分析するために、スタテイスティックノンパラメテックの方法を使用される。この方法の段階は；a) データが頻度的に、メックシムム点からミニムム点へ並べ、b) 特別なカテゴリーに通りに、そのデータを入り、c) カテゴリーにしたそのデータを分析する。

F. 実験する学習のスキーマ

この研究は実験研究で、一グループの実験研究である。この研究のサンプルはスマラン国立大学の三年生の学習者である。このサンプルを決定することは次の考えに基づき；1) サンプルは日本語の基本文型を勉強したから、2) 実験する学習のテクニックはサンプルの勉強している作文を書く学習の方法に関係があるから。それから、そのいがいには、このサンプルを決定することもスマラン国立大学の日本語の作文授業の先生に相談してからである。

この研究は第六回の学習時間がかかる。第一回と第六回はテストの時間である。第二回から第五回まではトリートメントをする時間である。つまり、実験する時間は第四回である。それで、サンプルは第四回に5W+1Hテクニックで作文を書いて学習する。その実験研究のプロセスのスキーマは次の通りである。

1. プリテストとポストテストのスキーマ

この第二回のテストの項目は同じである。それは話題が複文を書くことである。そのテスト項目はサンプルが勉強したことがある項目である。その項目は四つの文型できている。

すなわち；

複文

a. ~ から、~

原因を表す。

b. ~ が、~

前のと後のが違いのを表す。

c. ~ ために、~

動力を表す。

d. ~ たら、~

希望を表す。

上記の四つの文型で、学習者は作文のテストを優しく書ける。学習者はその文型に基づき、作文の構造や話題やテーマを広げることができる。それで、テストの命令に書かれ、学習者は書く作文にその四つの文型を使用する。

2. 第一回のトリトメント

この第一回のトリトメントに、学習に $5W+1H$ テクニックについてのことを教える。このことについて、教師は学習者に次のことを説明する。すなわち；作文を書く問題のこと、ある書く方法とかテクニックが作文を書きに焼くに立つこと、 $5W+1H$ という書くテクニックのこと、作文を書く学習に $5W+1H$ テクニックを使用することである。このセッションの終わりの活動は、ある決定した話題に基づき、 $5W+1H$ テクニックを使用して、作文を書いて練習活動である。この活

動をするために、学習者がグループに分けられる。一グループはメンバーが三人から五人までである。この練習活動に決定する話題は「忘れ物」である。

この第一回のトリトメントのインディケターは次の通りであり；

1. 学習者は作文を書く方法についてのが分かる。
2. 学習者は $5W+1H$ という書くテクニックを使用する。
3. 学習者は作文の話題に基づき、作文のテーマを設定し、意見を広げられる。

3. 第二回のトリトメント

第二回のトリトメントの教授項目は日本語のレトリックの文書についてである。そして、 $5W+1H$ テクニックで作文を書き、その作文にレトリックの文書を書いて入る。このセッションのインディケターは次の通りであり；

1. 学習者はレトリックの文書を書ける。
2. 学習者はある作文を書け、その作文にレトリックの文書を書き使用する。

そのレトリックの文型は次の通りである。

1. ~ か ~。

2. ~ かどうか ~ ない。

このセッションの活動のプロセスはブレインストルミング活動で始められる。その活動は「学習者が一緒に日本語のレトリックの文書についての知識を相談し合うこと」である。そして、その学習の知識のレビュー活動が終わった後で、レトリックの文書について、学習者の間違い知識があったら、教師はその間違いを正しくする。

それから、このセッションの本の活動は *5W+1H* テクニックで第一回のメンバーと一緒に作文を書く練習することで、その作文に入り、レトリックの文書を使用する。このセッションに書く作文は第一回の練習に関係がある。つまり、その作文の話題（忘れ物）に基づき、作文を書く。

この第二回のトリトメントの終わりに、教師は学習者に作文の書くのを続けさせる。そして、第三回の学習活動について学習者に説明する。すなわち、一緒に書いた作文をチェックする。この作文をチェックする方法は発表と相談し合いである。あるグループは作文について発表してから、他のグループはその作文をチェックする。

4. 第三回のトリトメント

この第三回のトリトメントは活動が前のトリトメントに書いた作文をチェックすることである。はじめに、各グループは一つずつ書いた作文を発表して、他のグループはその作文をチェックする。チェックする作文のアスペクトは； a) 作文に書かれている文書、特に、レトリックの文書、 b) 作文の話題やテーマとその作文の構造（5W+1Hの要素）に関係のあることである。

このセッションの学習の流れは；

- a. 書くグループは一つずつ書いた作文を発表する。
- b. 他のグループはその作文をチェックする。
- c. 各グループはチェックした通りに作文を正しくする。

この第三回の時、教師は役目が二つある。すなわち； a) 最初のセッションの時、発表とチェックする学習者、 b) 最後のセッションの時、相談し合いの結果について、間違いがあったら、その間違いを正しくするし、学習者を動機つける。

5. 第四回のトリトメント

この第四回のトリトメントは教授項目が比べる文書である。つまり、このセッションのインディケターは、学習者が比べる文書を書ける。学習する文型は四つ文型である。すなわち；

- a. ～と～とどちらが～。
- b. ～のほうが～。
- c. ～は～より～。
- d. ～ほど～は～ない。

授業の最初の活動はブラインストルミングである。教師は上記の四つの文型の使用することについて、学習者の知識をチェックする。その知識をチェックする方法は、教師が学習者にその四つの文型の通りに、文書を作らせる。そして、間違い文書があったら、教師はその間違いを正しくする。

それから、教師は学習者にある作文の話題を決定し、その話題が「新しいかばん」である。次に、学習者は教師の学習の通りに、ある作文の構造を設定する。この学習プロセスは次の通りである。

- a. 上記の話題に基づき、ある作文のテーマを設定する。
- b. そのテーマに関係がある $5W+1H$ の要素を見つけて、その要素からある作文の構造を決定する。
- c. 作文を書きながら、上記の構造に上記の四つの文型を書き使用するチャンスを見つける。

G. 評価のスキーマ

1. テストの評価

ヌルギヤントロ（2009：298）によると、言語学習について、教師が一つの心配することはストラテジーオブエヴォイデンスと言うことである。すなわち、間違いをして心配なので、学習者は特別な言葉、文型、などを使用したくなくて、他の言葉、文型、などを使用ことにする。それで、言語学習では、たとえば；書く学習をするとき、教師は学習の方法を理論的な言葉や文型の使用に学習する。その学習方法目的は、学習者がそのストラテジーオブエヴォイデンスをしないようにする。このように書く学習の方法を理論的なことに学習することは学習者の言語学以外の能力に影響がある。たとえば；教師は学習者の意見に関係のあることをあまり注意しなくなってしまう。ステデイ（2008）は作文を書く学習にそういうことを見つけた。

ブラウン（ヌルギヤントロ、2009：298）によると、書く学習は本当に意見を伝えることで、その意見を他の人とコミュニケーションすることという目的がある。つまり、各人はその意見を伝えるに自分のストラテジーがある。それで、書く能力は二つのアスペックがあり、理論的と実践的なアスペックである。理論的なアスペックは言語学的に言葉とか文型を正しく使用することである。

実践的なアスペクトは意見を設定し、その意見を広げ、良い作文にその意見をうまく書くことである。

上記の書く学習についての説明は書く学習のプロセスアプローチと同じである。プロセスアプローチによると、書く学習は自分の書くストラテジーを見つけに学習することである。つまり、他の言語学の能力（特には話す学習）より、書く学習のほうが長い時間をかける。それで、書く学習の評価は上記の理論的と実践的なアスペクトを表す。

上記の書かれているストラテジーオフェヴォイデンスについて、日本語の書く学習では、漢字が一つの問題である。もし、学習者は使用する言葉が分かったのに、漢字能力があまりよくなかったら、その漢字を見つけに時間をかける。このような問題があったら、教師は二つ選択的なことがある。すなわち； a) 学習者はひらがで書いても良い、あるいは、 b) その漢字を見つけさせる。普通は、学習者が (a) を選択している。学習者はその言葉とか漢字を書き間違いで心配なので、次の文書にその言葉とか漢字を使用しなく、他の言葉と変えて使用する。

書く学習に上記のような問題があったら、ブラウン（ヌルゴヤントロ、2009：298）が行って、「なぜ、デイスクレット的に、他のテストを実行するか」。つまり、学習者が漢字を使用し

ないことで心配でだったら、なぜ、デイスクリートの、漢字のテストを実行されるか。それから、教師は書く学習について、意見を広げ、構造的に良い作文に書くことをもっと注意する。タリガン（200）によると、ある言語学習者の意見は彼のある言葉である。つまり、意見を広げる能力は本当に語彙とか文法の能力を表すことができる。それで、この研究の評価の方法は漢字の評価がなくすることにする。その評価は次のアスペクトでできている。

- a. 言葉／語彙のアスペクト。
- b. 文型／文書のアスペクト。
- c. 意見とその意見を広げるアスペクト（書き物の構造）。
- d. 書き物の流れ（ストーリー）のアスペクト。

それから、一般的に、この研究の評価の方法は次の通りである。すなわち；

- a. 量的に、スコールのレーンクを設定する。
- b. 質的に、学習者の能力を設定する。
- c. 上記の（a）と（b）のポイントの基つぎ、学習者の書く能力を決定する。

上記の評価のアスペクトとその方法はヘニアテイ（2006）、セテアワテイ（2009）、ハルフィードのESLの評価

のモデル（ヌルギヤントロ、2009：303－305）に基づき、設定されている。この実験研究の背景と目的と適当にされてから、上記のような評価のアスペクトと方法を決定されている。特に、上記の評価の方法の（c）ポイント（質的な学習者の能力）はスマラン国立大学の評価の方法と適当にされている。

では、その上記の書かれているいろいろな評価に関係のあるアスペクトとその方法に基づき、評価のスキーマは次のようになる。

表3. 2. テストの評価のスキーマ

スコールの インターバ ー	説明
1. 言葉・語彙のアスペクト	
16－20	良い(B); 形態素的に言葉の形の変化が分かるし、場面的に間に合う言葉が使用されること。
11－15	まあまあ良い(C); 形態素的に言葉の形の変化が分か

	るし、場面的に間に合う言葉が使用すれないこと。
6-10	良くない(K); 形態素的に言葉の形の変化がすれないし、場面的に間に合う言葉が使用すれないこと。
2. 文書のアスペック	
16-20	良い(B); 文型的と場面的に間に合う文書を使用する。
11-15	まあまあ良い (C); 文型的とか場面的に間にあまり合わないが、文書に含まれる意見がまだ分かれる。
6-10	良くない(K); 文型的と場面的に間に合わなくて、文書に含まれる意見が分かりにくい。
3. 内容・意見を広げるアスペック	
21-30	良い (B); 内容・広げる意見がテーマに間に合う。
11-20	まあまあ良い (C); 内容・広げる意見がテーマにあまり間に合わない。
1-10	良くない(K); 内容・広げる意見がテーマに関係がない。
4. ストリーの流れのアスペック	
21-30	良い (B); ストリーがうまいし、エンディングが明らかに行く。
11-20	まあまあ良い (C); ストリーがうまくないし、エンデ

	イングが明らかに行く。
1-10	良くない(K); ストリーがうまくないし、エンディングが明らかに行かない。
	20 + 20 + 30 + 30 = 100

スコールを計算するプロセスを簡単になれるように、上記のスコールレーンクから、メックシムムを取り付ける。それから、そのスコールの計算する結果が1-10スケールとスマラン国立大学の学習者の作文を書く能力のカテゴリーに適切にされている。そのカテゴリーに基づき、学習者の作文を書く能力を決定する。使用する公式は次の通りである。

$$\text{値} = (S : SM) \times 10$$

説明;

S = 学習者が受けたスコール

SM = メックシムムスコール (スジャナ、2006: 438)

最後のスコールを見つけた後で、トリトメントの意味を見つけるために、プリテストの結果はポストテストの結果と比べられる。使用する公式は次の通りである。

$$t = \frac{Md}{\sqrt{\frac{\sum x^2 d}{N(N-1)}}}$$

説明:

t	= t 得点
Md	= プリテストとポストテストの違いの平均値
xd	= 各サンプルの偏差値(d-Md)
$\sum x^2 d$	= 偏差値のクアドラトの合計/数
N	= サンプルの合計/数
db	= N-1 (アリクント、2010 : 349)。

2. アンケートの評価

量的なデータを受けるために、アンケートとのデータがスコールにされる。スコールにされたデータがある頻度分布の通りに、並べられる。そして、カイクアドラトと言う統計の方法で分析する。そのカイクアドラトの公式は次の通りである。

$$x^2 = \sum \left(\frac{fo - fe}{fe} \right)^2$$

説明:

x^2 =カイクアドラトの値.

f_o =サンプルの答え頻度

f_e =ほしい答え頻度 (サンプルの合計 : 答え選択の合計)

